

第27回ペスタロッチー教育賞 受賞団体紹介

受賞団体：児童養護施設 舞鶴学園

【略歴】

舞鶴学園は、元新聞記者の山口勲氏が、1946年に有志数名と共に「財団法人 日本青少年自彊学会」を創設し、戦争孤児 11名を引き取って養育を開始したことに始まる。戦争孤児の養育の場として始まった「舞鶴自彊学園」は、1948年に児童福祉法の制定によって約50名を収容する養護施設となり、1952年には社会福祉法人の認可を受けて、「舞鶴学園」と名称を改めた。2001年には泉源寺へ移転(定員70名)し、小舎制を導入して新たなスタートを切るとともに、認可保育所タンポポハウス(定員40名)を開所した。また1995年には児童家庭支援センター「中丹こども家庭センター」を開設している。児童養護施設舞鶴学園の様子は2008年にMBSTVドキュメンタリー映像‘08『家族の再生』として、2015年にNHKハートネットTV戦後70年『戦争孤児から虐待まで』として放映され、大きな反響を呼んだ。また2015年には韓国の児童福祉施設との日韓交流(単独)事業20年目を迎えて、「高円宮記念日韓交流基金」より名誉総裁章を受賞している。

【受賞理由】

舞鶴学園は、戦後70年以上にわたり、児童養護施設として、虐待や貧困、保護者の死や病気等、なんらかの理由で保護者とともに暮らすことができなくなった子どもたちに生活の場を提供し、彼らの生活を支えてきた。今回はこの長年の活動が評価されての受賞となった。

ペスタロッチーの孤児院実践と同様に戦争孤児に養育を提供する場として始まった舞鶴学園は、少子化や社会情勢の変化によって子どもたちを取り巻く環境も彼らが抱える問題も複雑化し、従来の大人数を対象にした施設経営の限界を感じるようになる。そのため学園は、「問題を抱えた子どもたちが自分を取り戻していく場として、「一人ひとりが大切に受け止められている」「大人は信頼するに足る存在である」と実感することができる場として機能する必要がある」との認識に基づき、家庭的な雰囲気での養育の可能性を模索することになる。

日本の多くの児童養護施設がとっている大舎制から、一舎につき12名以下を定員とする小舎制への移行は、「子ども会」という組織を学園内に設置し、子どもたちが自分たちの意見をまとめて生活に反映させる仕組みづくりへとつながっていった。こうした取り組みが、子どもたちが家庭的な暖かさと信頼感を感じることでできる距離感、さらには人との関わりの大切さと自己が存在することの意味を体験しながら育ち合うことを可能にしている。

戦争孤児の救済・養育から始まり、子ども一人ひとりに寄り添いながら家庭的な雰囲気の中で養育しようと奮闘してきた舞鶴学園の取り組みは、貧民・孤児のために身を尽くしたペスタロッチーの思想と実践にまさに通じるものである。舞鶴学園の長年の活動に対し、第27回ペスタロッチー教育賞を贈呈し、高く顕彰したい。